

ついのべ抄

#002

しんしんと降り積もる雪に

年甲斐もなくはしゃいでしまう。

出来立てひやひやの積雪に足跡を付ければ

まるで絨毯のようにやわらかい。

霜焼けになるのも厭わずに作った二匹の兎は、

翌日には仲良く遊びに行ってしまった。

朝の習慣。

ヤカンに火をかける。

カーテンを開ける。

トースターにパンを突っ込む。

テレビを付けて天気予報確認。

沸いたヤカンからポットへ湯を移して

コーヒーを2杯淹れ……

またやってしまった。

きみはコーヒーを控えてるのだった、

と謝って、その大きくなつたお腹を撫でる。

「幸せだつて思った時には

もう幸せの中にいるつて事でしょ？」

うわ始まった。

「その幸せの頭をつかんでみたいのよ」

何だ頭つて。

「幸せスイッチみたいなの、実感してみたいのよ」

「幸せならいいけどね、俺は」

「今、とか？」

「そう」

ニヤリと笑う彼女を見てハメられた事に気付いた。

まず恋心を溶かします。

とろとろになった頃合いを見て

甘い言葉を加えると良いでしょう。

あとは型に入れ、冷やして固めれば出来上がり。

くれぐれも熱には気を付けてください。

せつかく飾り付けた恋心がとろとろになって、

お相手を汚してしまいますから。

「鉄板のジョークを教えてあげる」

彼は自信満々に言う。

「その日僕はドライブを楽しんでいた。

海辺を走っていると、

2台のベンツが埋まっているのが見えたんだ。

不思議に思つて近付くと1組の男女がいた。

「何があつたんだい？」

彼らはこう答えた」

残念だが文字数がオーバーした。

いぬ。ひょうき。ペンギン。

キヤベツにトマト、バナナにリンゴ。

「パパー！」

抱え上げた息子が指差したのは、

ふつくらと丸みを帯びて饅頭にしか見えない。

顎と腹のラインが杞憂である事を祈りながら、

また、息子と雲を数える。

私は万年筆である。

スマートな装飾の施された万年筆である。
常に紳士たれと教えられ生きてきたが、
周りを見回せばボールペンでいっぱいだ。

先日、鉛筆と話した。

「全部壊れればいいのに。シャープペン」
とぼやいていた。

他者を愚弄するのはスマートではないが、
私も少し淋しい。

こんにちは、卵です。

目玉焼き、

ゆで玉子、

スクランブルエッグにオムレツ。

何にだってなれる、卵です。

あなたは何になれる卵ですか？

胸に穴が開いた。

何か埋める物はないかと探し回って

1人の女と出会った。

埋めてもらった胸は温かかったが、

彼女の胸に穴が開いてしまった。

何か埋める物はないかと探し回って

1人の男と出会った。

胸を埋めてもらった彼女は笑顔になったが、

僕の胸にはまた穴が開いてしまっている。

「落としたよ」

僕の手から切符を受け取った少年は

辛うじて聞こえる程度の礼を言つて頭を下げ、

足早に列車へ乗り込んだ。

必要最小限の手荷物しか持たない後ろ姿を

小さく応援する。

ここから始まる彼の旅に思いを馳せた。

がんばれよ。10年前の僕。

ついのべ抄

#002

了

Written by nakoso (as inabetz)

© nakoso 2010

<http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>

Release Date 2010/4/14

Twitter (as inabetz) :

<http://twitter.com/inabetz>

Mail :

nakosokan@gmail.com



「ついのべ抄 #002」

by nakoso is licensed

under a Creative Commons 表示-非営利 2.1 日本 License.

Based on a work at <http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>